

ドラマに懐かしい思い出

十勝ゆかりの劇作家 山田太一氏 断筆宣言に寄せて



海保進一さん

先日、本紙のコラムに、劇作家山田太一氏の著作「幸福駅周辺」と題したドラマが、ブームが去った後の同地の人間模様を描いて、そこが若者たちの愛の聖地であることを不動のものにした、と書いた。

その矢先である。本屋さんの店頭に山積みされたある週刊誌の表紙の見出しに、同氏が「この1月、脳出血で倒れ、言語・執筆活動に支障をきたし、絶筆宣言を余儀なくされた」と刷り込まれているのを見て、思わず息をのんだ。

年頭の賀状では「思い出は過去に戻れない人間に、その代償として神が与えてくれた宝石だと思っが、最近、そのヒントも合わなくなっ」と述べておられた。今にして思えば、その前兆であったのだろうか。

氏は日本を代表する劇作家の一人

気さくな人柄、無理な注文快諾

ありながら、少しも高ぶったところのない気さくなお人柄。前述のドラマでも、当方の「地元のアマチュア演劇サークルの男女にも出演の機会を与えてくれ」との勝手な注文にも快く応じてくれた。

分厚な書簡をやりとりし、協議した結果、主役の愛国駅駅長に扮（ふん）した佐野浅夫さんが終車が出た後に駅舎を施錠し無人にする所作に抗議する、東京からの観光の女子大生として、名をキャストに加えてくれた。

その出演者を地元で公募してオーディションを行い、その演技指導を任されてNHK帯広局のスタジオでしたことも、今では懐かしく思える。

なお、その時の現地ロケ（1978年5月10・18日）の写真や、「劇中劇」に大樹町の小島秀俊さん（元教育長）が演出した同町の演劇サークルの「幻想隧道（ずいどう）」（作／海保）、さらには今では貴重な郷土の文化遺産の「（当時の）放送台本」などの資料も所持しているので、本紙や地元局の資料として、請われれば喜んで寄託したい。氏のご本復を心から願いつつ。

（帯広大谷短期大学非常勤講師）